

# 「知れてよかった」の違和感を探る

## ー 自動詞「知れる」と可能動詞 ー

宮武 利江（文教大学）

### 1. はじめに

最近、学生のリアクションパーパーで「今日は〇〇のことを（〇〇について）知れてよかったです！」というような表現を目にするようになった。個人的には、この「知れてよかった」という言い方に何ともいえない違和感がある。現代日本語においては、形の上では五段活用動詞「知る」の可能動詞「知れる」が存在するはずだが、どうもこの語が自分の使用語彙にないのである。「名の知れた店」のような「知れる」は使っているが、これは可能ではなく、「広く知られている」という意の自動詞であろう。古語の下二段活用動詞「知る」が、現代語では下一段「知れる」となり、「知られる」の意味になる用法以外に、「知れたこと」「たかが知れ（てい）る」「おさとが知れる」など「わかる」と置き換え可能な固定的な慣用句として使用されることが多い。このような言い回しは、自分では使わないまでもよく目にするし、読んだり聞いたりしても引っかからないが、「わかる」と「知ることができる」は意味的には近いと思われるのに、可能の「日本語の歴史が知れた」はおかしく感じるのはなぜなのだろうか。慣用的表現は単に聞き慣れているからだろうか？「（人の）気が知れない」というときの「知れない」は不可能ではないのだろうか？「かもしれない」のようにモダリティ表現になっているものもあるが、これらの「知れる」は、果たして自動詞なのか、可能動詞なのか。自動詞が可能の意味を持つことがあること、可能動詞がガ格を取ることなどは既に指摘されているように（注1）、両者の境界には曖昧なところがある。また、他動詞「知る」＋「れる」の自発・受身表現と自動詞「知れる」の使い分け、「知る」と「わかる」の使い分けなどは、日本語教育分野においても取り上げられている問題である（注2）。本発表では、コーパスを用いて歴史的な使用状況を通時的に概観した上で現在の口語的資料の用例も確認し、「知れる」をめぐるいくつかの問題について整理して、「知る」の可能動詞としての「知れる」の位置づけを考えてみたい。

### 2. 「知れる」の用例

#### 3.1 近世以前の用例

「日本語歴史コーパス（注3）」を用いて検索すると、下二段活用の「知る」は近世までで299件（明治以降の文語文に239件）、下一段「知れる」は虎明本狂言の1例を初出として、他は近世に199件が抽出される。

初出は、確例は万葉集で4例ある。

我が思ひを人に知るれや〈人尔令レ知哉〉玉櫛笥開き明けつと夢にし見ゆる（四・591）は、使役と解されており、他に1例「人に知れつつ」（1446）があるが、平安期の作品では使役ととれる例は見られない。というより、175例中、本文に疑問のある1例、後撰集の万葉1446番歌を除くと、ほぼすべてとなる172例が「人知れず（ぬ）」である。

忍ぶれば苦しきものを人しれず思ふてふこと誰に語らん（古今・十一・516）  
「人に知られることなく」という受身と解釈すれば「人に知られず」と重なりそうだが、「知れず」の方が「に」が示されない分「誰かに」「知られる」という動作性が弱いように感じられる。他人が知ることがない状態で、のように解釈できるのではないか。次の1例だけが近世以前の唯一の命令形であった。

恋ひて経んと思ふ心のわりなさは死にても知れよ忘れがたみに（後撰四・820）

鎌倉・室町期になると、全63例中「人知れず」は20例と減少する（とはずがたりに集中）。他の未然形19例のうちに、「～（と）も知れず」7例、「知れぬこと」など、近世で多くなる連語が現れる。また、狂言で「知れまい」が7例、連用形「知れて」「知れた」が各5例と6例、連体形「しるる事」「しれる程に」が1例ずつ見えるが、終止・已然・命令形はない。「知れて」「知れた」などは、文中での意味としては「知られた」という受身と「わかる」に置き換えられるものとなる。「人知れず」より受身との違いが見えにくい。また、可能を表すと考えられる例はなかった。

続いて江戸期であるが、歴史コーパスの範囲では未然形214、連用形222、終止形と連体形が12で已然形・命令形は0。「人知れず」が人情本の中に13例、「～も知れず」などは80例あったが、人情本に「～かもしれず（ない）」が初めて現れる（15例）。また、洒落本に見える、

此方の心底は知れて有じやないか。（洒落本・南遊記）  
のような「しれてある」が、1830年頃から「しれてゐる」になっていく。連用形で多いのが「知れたこと」で56例、「知れた」の終止形も見られる。

よいよい、様子は知れたぞ。（近松・淀鯉出世滝徳）

ヲやお菊さんよく爰（ここ）がしれたね（人情本・春色連理の梅）  
「わかる」の意で用いられているこれらが、可能動詞と見られるかどうかだが、筆者としては「知ることができた」と情報の積極的な「獲得」を表しているのではなく、「知れたこと」と同じく、「判明する・わかる」の意になる自動詞と解すべきかと思う。先行研究によれば、可能動詞は中世末～近世に成立したとされる。ただし、初期は限られた動詞のみという。筆者の確認した限りにおいては、ここまでの「知れる」に可能動詞と解釈できる例はないということになる。

## 2.2 明治以降の用例

まず日本語歴史コーパスで明治・大正期の例を検索したところ、未然形が1894、連用形が546、終止形が31、連体形32、假定形1、命令形1、合計約2500という用例があることになる。未然形では「～かもしれぬ」672・「～かもしれない」802で、約8割を占める。ヲ格を取る例に「明日をもしれぬ」などが3例だけあったが、可能動詞とは思われない。ちなみに、コーパスで連体形「知れる」にカウントされている中に、具体例を確認すると「知る」＋助動詞「り」であると思われるものが11例あった。

…未だ用地時代の産物であって、少くとも結核の病理を知れる医家の試みざる所であります。(太陽(1925)・肺結核の妙薬として見たる肝油の効能)

證人の知れるところを申し立てよ、(太陽(1925)・長編探偵小説ハートの九(翻訳))  
これらはヲ格であっても当然ということになる。

直前にガのある例は112 あったが、「気がしれない」「名が知れた」「たかがしれている」などの慣用句とともに、以下のような「判明する」の意になる例もそこそこある。これらも可能ではなく「自ずと知られる」という自発のように解せよう。

最初は留守だと思つたが、二返目には病氣で寐て居るといふ事が知れた。(漱石・猫)

続いて「現代日本語書き言葉均衡コーパス(BCCWJ)<sup>(注4)</sup>」を用いて現代語の例を検索すると、「知れる」の総数は約39000件、「かもしれ〜」が約36500件ある。未然形約25000件のうち、「かもしれない・かもしれず」が24000ほど、連用形約3500件のうち「しれません」が12400ほどである。終止形73・連体形39・仮定形17・命令形0となっている。

ヲ格はもちろん、ガ格を取る「知れる」も可能動詞の可能性が高いのではという想定で確認してみたところ、Yahoo!(2008)に7例、他3例の可能動詞「知れる」が見つかった。

①こんなにすごい人がいるんだってそういうのを知れただけでもすごい勉強になったって♪(Yahoo!ブログ)

②そんな亮ちゃんを知れてよかったなー、と思う。(「知れてよかった」他に2例)

③私は主の愛を半分しか知れません。

④今日のありがとう3つ。知りたかったことが知れたこと。

⑤…があれば教えてください。大体の相場が知れればと思っております。

⑥和紙染めのことをよく知れてよかったです。(『広報有田』2008・中学2年生)

⑦違った考え方もあるんだってことを知れたかもしれない。(『パンドラの箱』2004)

⑧雁のゆきつく先のところを私なら知れると思う(『村上昭夫詩集』1999)

また、「話し言葉コーパス(CSJ)<sup>(注5)</sup>」の検索では未然形1304、連用形1051、終止1・連体3。未然形は「かもしれない」、連用形は「かもしれません」がほぼすべてとなっている。なかで、可能動詞と思われる用例は4例であった。

⑨その時代にえーと知れたと言うのか身に付けられたことは非常に貴重なことだったし…(1970-74生、30-34才)

⑩誰が参照点を知れることができるだろうかと…(1965-69生、30-34才)

⑪ユースホテルに泊まるっていうのは色んな国の人と話して色んな国の事情が知れると…(1945-49生、55-59才)

⑫団地のお母ちゃんでも皇室の記事は知れます、皇室の生活知れますが…(1950-54生、50-54才)

現代の、話し言葉(およびそれに準ずるブログの言葉)において、わずかだが可能動詞「知れる」が使われ始めているということになるだろう。(⑩のように「できる」も加えたいくなる程度ではあるが。)

### 3. 辞書の意味記述と先行研究

『日本国語大辞典』の「しれる(知)」(ラ行下一)の項を、用例とともに引用する。

- (1) (「知る」に対する受身・使役形で、「他人の知るところとなる」の意を、消極的には受身として、積極的には使役として表現したもの) 知られる。また、知らせる。わからせる。

\*万葉集〔8C後〕八・一四四六「春の野にあさる鳩（きぎし）の妻恋に己（おの）があたりを人に令知（しれ）つつ

\*古今和歌集〔905～914〕恋三・六三二「人しれぬわが通ひ路の関守は宵々ごとのうちも寝ななん〈在原業平〉」

\*洒落本・広街一寸間遊〔1778〕「あんまり四国四国といふと、おれがおさとがしれるちっと、しづかにたのむ」

- (2) (「知る」に対する自発・可能形) 知ることができる。自然にわかる。

\*虎明本狂言・犬山伏〔室町末～近世初〕「一どにてはしれぬ。ま一どあひいのりにいのらふ」

\*説経節・説教菰萱〔1631〕下「さるほどにあはふとおもへばそへふだをし、あふまひとおもへばそのふだをひくによって、三日がうちにありしよがしるるなり」

\*浮世草子・好色一代女〔1686〕五・三「女はしれぬ仕合のある物にて」

\*古道大意〔1813〕上「皇国の古伝説の、小縁（おぼろけ）ならぬ訳がしるるでム（ござる）」

\*尋常小学読本（明治三六年）〔1903〕〈文部省〉四・一八「わが国のつよいことが、まへよりも、よく、がいこくに、しれるよになりました」

\*我が輩は猫である〔1905～06〕〈夏目漱石〉九「門外漢から見ると気の知れない道楽の様であるが」

\*我等の一団と彼〔1912〕〈石川啄木〉四「其の製作を匿名で或私設の展覧会に出したことが知れて師匠から破門され」

\*苦の世界〔1918～21〕〈宇野浩二〉四・二「えたいの知れないうそ情ないやうな、泣けて来るやうな衝動がおこって来たので」

五段動詞に対応する可能動詞については、日本国語大辞典では特に見出し語となっていないので、この「知れる」はあくまでも自動詞である。ところが、(2) では「自発・可能形」とあり、自動詞「知れる」に可能の意味があるとされている。ただし、これは初出例が狂言で、中世末期、あるいは近世初期以降に新たに生まれた用法ということになる。可能動詞の成立時期は一般に中世末～近世前期とされることを考えると興味深い。(2) の 2 例目、説経節の用例は「しるる」で下二段活用自動詞だが、下一段になると可能動詞と同形であるから、両者の混乱があるかもしれないからである。

一方で、例えば「裂く」と「裂ける」の項を比べてみると、「裂く」には

(1)一つにまとまったものを、手などで二つに離す。ひきやぶる。やぶく。割る。

(2)刃物などで切りひらく。切り割る。切り裂く。(3)目尻などを裂いて入墨をする。

(4)人と人との仲を隔てる。(5)一部を分けて他にあてる。)

とあるのに対し、「裂ける」は

(1)一つのものがするどく線状に切れて二つに離れる。また、切れ目がはいる。

(2) 露頭することをいう、盗人仲間の隠語。)

であり(それぞれの(1)の語義の初出は日本書紀と古事記なので、どちらかが後から生まれたとはいえない)、「離す・切る」という他動詞と「離れる・はいる」という自動詞とで説明されているのみで、「受身・使役・自発・可能」のような用法の説明は付されていない。自動詞でも「知れる」が特に受身、自発、可能といった意味で解釈され得るということのようである。ただ、(2)の例として挙げられている「(日本が強いことが)外国に知れる」「(都合の悪い事実が)知れて師匠に破門される」のような例は、一般の可能動詞のように可能を示しているとは解せないのではないか。判明する、明らかになる、というような自動詞的な意味で、引かれた例はほぼ解釈できる。

ちなみに、[-eru] [-ru]の対応関係が同じ動詞の組は他にも多くあるが、他動詞「解く」に対する自動詞「解ける」も、「疑問が解けた」というようなときに可能の意味があるように感じられるかもしれない。しかし、『日本国語大辞典』に、特にそのような記述は見当たらない。8つのブランチのうち、「(1)結ばれていたものがわかれ離れる。結び目がほどける。(3)心のへだてがなくなる。なれ親しむ。うちとける。(4)安らかな心になる。安心する。」は万葉集が初出、「(2)腹立ち・不機嫌・恨み・悲しみなど、心のわだかまりが消える。」と「(5)役目・責任・契約・制限など、束縛となるものが除かれる。」が平安初期点本・古今集・源氏などの中古文献から、(5)の延長のような「(6)防備・警戒・包囲などのためにとっていた態勢がゆるめられる。解かれる。」の初出が落語で19世紀末、そしてこのブランチの説明に「解かれる」が使われているが、可能ではなく受身の意味である。「(7)組織されたものがばらばらになる。解散する。」は大正期(徳富蘆花)から。最後の「(8)疑問や問題に対する答えが出る。また、よくわからなかった点がはっきりして了解される。」が、最初に触れた「疑問が解ける」の用法だが、初出は文明本節用集(室町中期)「惑而不從師其為惑也終不解(トケジ)矣[師説]」で、他に芭蕉の『冬の日』の野水句「あはれさの謎にもとけし郭公」、明治以降の「この疑問は遂に解けた例しが無い」「黒板に即題を出して正解(トケ)た生徒から順次教室を出すのであったが」が示されている。(8)の説明も「答えが出る」「はっきりし(する)」と自動詞、さらに「了解される」という自発となっていて、「解くことができる」というような表現ではない。つまり、「ナゾが解けた」「疑問が解けた」は自動詞であり、はっきりと「解くことができた」という解釈になる「長らく手こずっていた問題が解けた」のような場合は可能動詞と考えるべきだということかと思われる。

とすると、「知れる」の(2)も、「自発」であって「可能」ではないと言えることになるだろうか。仁田(1997)の言う「自発的受身」の「論理的自発性」を持つ動詞たちの例に「知る」は入っていないが、「ある事態や状況が判断・思考の前提として存し、その前提からすれば、〈自発的受身〉として表されている思考・認知活動の対象たる内容の成立が、当然であり自然であり」、「そういった内容を引き出した思考・認知活動の出来が、当然であり自然である」、ということを表すという「理解される」「見られる」のような「れる・られる」による「自発」の表現と、自動詞「知れる」の一部の用法は重なると考えられる。ただ、「解ける」と「知れる」の異なる点は、対応する他動詞「解く」と「知る」の意図性の違いである。「解く」は動作主の意図なくして成就し得ないが、「知る」は受動的に生じることもある。このような「知る」において、「自然と知ることになった」と「知ることが

できた」は近接しており、結果的に自動詞が可能のような意味で用いられることになり、積極的動作としての「知る」行為に関わる可能動詞の必要性が低かったのではないだろうか。「理解する」は「理解できる」で可能を表すが、直感的な「わかる」の可能動詞「わかる」がふつうは使われないのと同様である。多くの四（五）段動詞に対応する下二段可能動詞が発生したとされる近世、また近代においては、可能動詞「知れる」はほぼ用いられていなかったと考えられる。

青木（1996）は、「四段動詞の下二段派生」によって作られた「読むる」等の下二段動詞は、否定文中において可能の用法を持つようになり、「後にその可能の用法のみを担うものとして確立していったのが「可能動詞」である」とし、「可能動詞を作り出した「四段動詞の下二段派生」は、その初期段階においては可能・受身・尊敬等を表すものであり、後にその用法を可能形式へと狭めたものと考えられる」と言っている。さらに江戸初期の可能動詞は「読む」「飲む」などの「対応する自動詞を持たない他動詞」のみから生まれたもので、それ以外のすべての四段動詞から下二段可能動詞が発生し、「可能動詞が確立」したのは1800年頃と推定している。三宅（2016）は青木の指摘を踏まえ、中世抄物資料の下二段派生形を調査して、可能の意で解釈できるのは「読ムル」一語であり（ほかには尊敬が多い）、「動作主が明示されず、対照語が主題・主格で明示されるか連体修飾されるという環境下においてのみ」可能の意となり、「多くが否定形で現れるという特徴もある」という。

#### 4. 結語

ここまで、本発表では「知れる」の使用について歴史的な推移を確認しながら、自動詞の可能用法と可能動詞の見分けについて考えてみた。「知れる」は現代においては、形の上で下一段活用の自動詞と五段動詞「知る」の可能動詞という二種類があることになるが、自動詞「知れる」は紙谷（2010）によると「わかる」やその他の語に交替している部分が多く、用法はかなり限定的になってきているという。一方で、可能動詞「知れる」は、明治大正以前、さらに現代でも一般の文献中に確例を見出すことは難しく、話し言葉で「知れてよかった」のような文脈に現れるケースが少しずつ出てきているという状況である。もともと自動詞「知れる」が消極的な可能の意味を表すことにより、可能動詞「知れる」は長く生まれていなかった。しかし近年、自動詞「知れる」の衰退により、事柄を「理解する」意に近い「わかる」とは異なる、情報の「受容」を表す「知る」の可能動詞が、積極的な情報の「獲得」を意味する語として使われ始めているのではないだろうか。

今回は「知る」「知れる」「わかる」の使い分け、可能動詞の成立の個別の事情などの点を掘り下げることができなかったが、今後はこれらについても細かく分析していきたい。

注1 「無標式の文が〈可能〉の意味を表す」という文法現象については、五藤（2017）が先行研究の整理をしている。「基本的に有対自動詞によって表され」「動作主の意図の存在が含意される」ことがほとんどであるという。そして可能動詞と同形の有

対自動詞、例えば「折れる」が「カッターの刃は手で簡単に折れる」というように動作主体が意図する事態を表す文において用いられると〈可能〉の意味が読み取れるが、この場合は可能動詞として捉えられるとする。

注2 「知る」と「わかる」の使い分けについては、明治期の使用実態から「知れる」から「わかる」への交替を論じた紙谷（2010）、談話分析を用いた芦原（2010）、日本語学習者への類義語指導のための基礎研究という位置づけの、生天目・高原・砂川（2017）などの研究がある。

注3 国立国語研究所『日本語歴史コーパス（CHJ）』

<https://ccd.ninjal.ac.jp/chj/index.html>（2021年11月5日確認）

奈良時代から鎌倉時代の作品の本文は小学館『新編古典文学全集』による。室町時代編は『虎明本狂言集』『天草版平家物語・伊曾保物語』、江戸時代編は洒落本30作品と人情本8作品のデータを公開。さらに、明治・大正編として、明治期から大正期までの各年代（1874～1925）を代表する雑誌の一定の年数ごとの刊行分、小学校・高等小学校で使用された国定国語科教科書、明治初期に刊行された主要な口語資料のデータを収録している。

注4 国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス（BCCWJ）』

<https://ccd.ninjal.ac.jp/bccwj/index.html>（2021年11月5日確認）

書籍全般、雑誌全般、新聞、白書、ブログ、ネット掲示板、教科書、法律などのジャンルにまたがって1億430万語のデータを格納しており、各ジャンルについて無作為にサンプルを抽出している。

対象は出版物として刊行された現代日本語の書き言葉で、WEB上の文書についてはQ&A掲示板のテキストなど一部が対象。収録対象の刊行年代は、最大30年間（1976～2005）、メインとなる書籍の場合は、1986から2005年。

注5 国立国語研究所『日本語話し言葉コーパス（CSJ）』

<https://ccd.ninjal.ac.jp/csj/index.html>（2021年11月5日確認）

#### <参考文献>

青木博史（1996）「可能動詞の成立について」『語文研究』81（九州大学国語国文学会）

仁田義雄（1997）「自発的受身」『日本語研究』17（東京都立大学）

青木ひろみ（2008）「可能表現の対象格表示「ガ」と「ヲ」の交替」『世界の日本語教育』18（国際交流基金）

葦原恭子（2010）「日常会話における「わかる」と「知る」の使い分けー談話の分析を通してー」『留学生教育（琉球大学留学生センター紀要）』7（琉球大学）

三宅俊浩（2016）「可能動詞の成立」『日本語の研究』12-2（日本語学会）

五藤絵里加（2017）「無標式可能表現に関する一考察：有対自動詞文を中心に」『国文学研究ノート』56（神戸大学「研究ノート」の会）

生天目知美・高原真理・砂川有里子（2017）「多義動詞としての「知る」と「分かる」の使い分けーコーパスを活用した類義語分析ー」『国立国語研究所論集』12（国立国語研究所）

紙谷榮治（2010）「「知れる」と「分かる」」『關西大學文學論集』59-4（關西大學文學會）